

### 賃貸物語(3)

## 犬を盗まれた

小野 友貴枝

「犬を盗まれた」と、詩のフレーズのように、里村美穂さとむらみほは口に乗せて、哀しそうに笑った。

### (1)

貸家のA棟を、里村宅から賃借している竹内夫婦は、二十年前、入居してきたときから、ずっと、犬を飼っている。夫婦には子供がいらない、犬好きなのは妻のようだ、犬を世話するのは妻の亜矢子、これも当然だ。室内で飼っている犬の世話は、排泄だけ考えても結構手間暇がかかる。

この世話は、小さな子供を育てるのに似ている。オシッコのたびに汚す、トイレシートを使って、その上に手作りのバスタオルの敷物。どのように床、畳を覆っているのか知らないが、大きなタオルケット。これらを一日置きに洗って軒先の洗濯干し竿三本に干す。白い布ばかりでない色鮮やかな模様もあって目を引く。コンクリートのベランダに一昼夜かけて、乾ききるま

で干す。子育て以上に世話の掛かる仕事を亜矢子は長年続けている。これを外から見て感じるので、彼女は、室内では、もっと世話の掛かる仕事をしているはずだ。餌、風呂、毛のブラッシング、などを絶えず、犬の世話に追いかけられている。その上、犬の臭い消し、病気の時の手当、日課の運動は必然性があるから決まっている。犬のケージはどのようにしているのだろうか、日中、共稼ぎの生活、その留守の時間帯に居る場所はどうなるものだろうか。そこで、犬は、どんな遊びをしているのか、外から見ではわからない。

二十年前初めてつれてきた犬は、美穂は見たこともないほど大きく、びっくりした。犬の種類は、サモエド。四十キロ近くもあって。まっ白い毛なみは全身を覆い尻尾など、毛の玉を背中に乗せた感じ、いかにも北国の犬で、珍種だと言うことが分かる。サモエドは外に出すことがなかったから、亜矢子が連れ出した時、美穂はそばによつてちよつと見るだけである。

入居してきたときのことが忘れられない。大きなまっ白な犬を亜矢子は肩に担いできた。こんなに大きな犬が同居することを知らなかった美穂は、びっくりして、

「ここは、そろそろ決まりそうなので……」と、外にいた賃貸者の美穂は、慌てて声をかけた。声をかけなければ、言葉もなく玄関の戸を開けて、中に入りそうだったから、見ず知らずの人を制するように、脇に立った。

犬を背負った亜矢子は、あ、と言って振り向いた。平べったりした感じの顔に薄い髪をまとめ、後ろに束ねていた。

「大家さんですか、不動産さんから電話がありませんでしたか。私どもが、手続き中なのですが、なんとかこの犬にも見せたいと思って、ね」と、連れ添ってきた男に声をかける。

夫らしき人は、一歩引いた感じで、入口に立っている。

「私は何にも。家の中にいる夫が訊いたのかも、でも鍵掛かっていませんからどうぞ」

彼女は、自分で持ってきたスリッパで室内に入って、犬に「サブ、どうかしら」と声をかけている。彼女のグレイの長い上着と、ズボンスタイルは今まで働いてきた仕事着のようだ。

もちろんA棟の契約は進んでいる、その当人なら、断る理由はない。その夫婦が車で来て、犬まで一緒に

連れてきたとは想像つかなかった。それも日暮れ時で、千葉から来たという。契約書もまだみていない、不動産屋の立ち会いもなく夫婦だけで。美穂がいたから良かったが、用心深い夫、修司だけだと、予約なしで日暮れの早い十一月、追い返されてしまう。

「竹内」です、と車を降りた夫が挨拶した。

「まだ書類を見ていないのですが、犬も一緒に？」

美穂は、室内犬と同居なのかと一瞬思ったが、まだ相談されたわけではないので、自分を制して、それ以上は確かめなかった。

「大人しい犬ですから、大丈夫です。友達に頂いたのですが、今までの家は集合住宅でしたので、犬が馴染みません、また、ここで職場も小田原に配属になりましたから、この辺から通うのはちようどいいかなと思えます。家が空いたばかりと訊いてきました」

「そうです。まだ半月もたっていないので、畳はまだ取り替えていません」

「きれいじゃないですか、いいですよ、どうせ犬が留守番ですから」

亜矢子は、もう靴を脱いで玄関からとつっきのカーペットの六畳間に入ってしまった。この部屋は板の間で、その続きが六畳とその隣が四畳半で、普通の貸家

よりも広い、そのせいか、築四十年経つが空いたことがなく、今回のように空くとすぐに待つていたように希望者が出る。もちろん貸家だけでなく車を置くスペースも広い。彼女は部屋の雰囲気を見て、得心したのか、犬と一緒に出てきた。

「大きな犬ですね、初めてみます」

「三年前から飼っています。サモエドというロシアの犬で、日本では珍しいのです。大人しく、人に馴染みます。犬嫌いですか」

「いや、犬は庭にいます、でも室内犬は、貸家に向きますかね。狭いですよ」

「狭くても大丈夫です。今まではもつと小さな集合住宅にいましたから」

「犬と一緒にするのは初めてですから、何と返事したら良いのかわかりませんが、不動産屋とも相談します」

大きな犬のことで頭がいっぱいで言葉がでない。

「ぜひ、おねがいます。犬がいないと、生活できないというのか子供がいませんので寂しくて。私はこちらに来て、前と同じ系列の介護施設で働くつもりです」

「でも、私は初めてですから」

「一軒家を探しています。どんなに古くてもいいので

す。ただ、隣り近所の人が、迷惑だと言われると困るのです。その点この犬は、人にはほとんど吠えませんが、大丈夫です。でも犬が嫌いだと駄目で、そのところを、考慮して見つけています。この犬なら絶対に迷惑はかけませんから」

「家にも犬はいます、柴犬を飼っています。夫が好きで、長年」

「良かった、犬好きの人が大家さんだと、条件に合います」

「夫とも相談して、返事は不動産屋にします」

よろしくお願いしますと、丁寧に頭を下げた竹内夫婦、夫は一言もしゃべらず、大型のライトバンを運転して帰って行った。

犬を連れだた竹内夫婦にとっては、一日でも早く契約したい貸家だったので、その下見に犬も同伴で。

ひとり合点して、そして来月には入りたいと、言い置いて帰っていった。

立ち会った積りではないのに、家に入ると、夫の修司が「何だ、あれは」と結構気にしている。

「家を見に来たのですって。突然入ってきたからびっくりした。犬と同居するので、用心深くしらべたかったようです」

「どんな犬だ」

「見たこともない、大きな牛のような犬、真つ白でフサフサ、私は初めてみた。私が抱いたらぶっ倒れそう」  
「真つ白な毛深い犬ならサモエドだ。顔が小さくて目が可愛いだろう」

「顔までは見えなかった、けど私には吠えない」

玄関先での会話だ。犬好きの夫だから、気になるよううだ。気になるなら、外へ出てくればいいものを、賃貸者関係の人と付き合いは用心深い。

「白い犬か、ちよつと凶鑑で調べる、」

動物凶鑑は、夫の愛読書。家でも長年、番犬として柴を飼っているから、犬には関心がある。

「どんな犬だ、これで見えてみる」

凶鑑を広げて、指をさせと言いながら座りこんでいる。

「そう、こんな感じかしら、夜目でもわかるほどまっ白い毛が、長く顔に、首に垂れている。ともかく全身が白い毛で覆われて、まるで人工的に造った犬のよう」  
いやぬいぐるみのプーさん、プーさんは熊だが、入ってきた女性の背中にいる白い犬は、全体からみて間違はなく凶鑑の顔だ。眼が小さくつぶら。

美穂の説明がうまかったのか、修司は「これか」と

言って犬の種類を書いたページを見せてくれた。

「うん、これもね、サモエド。原産ロシアですって、日本には二〇〇頭以下しか入っていない、と書いてある」

「俺も見たかったな。日中見れるかな」

「見られますよ。明日には契約してしまうのではないかしら。貸家気に入ったみたいだから」

「それは良かった、Aの貸家、空いてから一月も経ってないのに。まだ改修が済んでいない、だろう」

「そう、畳の取り換えと外のペンキがまだなの」

「そんなことどつちでもいいからその犬、みたいな。室内犬だと本当に言ったな」

「間違えませんよ、あの白さは、室内でなければ持たない」

「しかし、大きいと言ったけど、そんな犬、どうして飼っているんだろう」

「たしかに大きかった、私はぬいぐるみを被っているのかと思った。そうそう知らない人でも吠えなかった。そして離れている眼がやさしい、感じだった」

「楽しみだな、入ってくるといいな、見てみたい」

犬好きな夫はそれだけの情報で、すっかりA棟に入る予定のサモエド犬の虜になってしまった。美穂は、

なんかいやな予感がする。今までも、犬好きの夫とトラブルが絶えない、夫は、犬を室内で飼いたいという気持ち、美穂は絶対に嫌だと言って止めてきた。

「誰が世話するのですか、誰が掃除するのですか、風呂には誰が入れるのですか」と、面倒見ることなど絶対に出来ないくせに、「犬は、室内」だと、世帯主の権利を主張する。美穂もこれと決めたら引かない。犬を室内で飼うなら、別居するか、最悪離婚すると決めた。夫婦だけの生活で、夫はだらしなく洋服は部屋中に脱ぎ捨てる、書斎に入れば、本の山積み、どの部屋も家族よりも本優先だ。夫は本を買ってくるのが好きで積読ばかり。よく、高校の歴史の先生が務まるのかと不思議に思っている。給料は高いだろうが、そんなものは、本代になってしまう。毎日毎日買ってくる、お得意の古本屋を抱え込んで、本の収集癖を発揮する。結婚三五年目で、応接間が機能しない、本の倉庫になってしまった。

片付けられない修司の性格がどんなに美穂に負担がかかっているか想像したことがあるだろうか、その上に犬が家の中で動き回ったら、秩序ある家庭生活は保障されない。

「室内犬を飼うときには、すぐに別居します」と宣言

した。修司は、外飼いの犬で我慢をしている。それも、長年飼いやがっている柴犬。

修司よりも、四歳下の美穂は、保健所保健師で仕事をしているせい、犬の苦情には詳しい、中でも室内で飼っている犬の苦情が一番多い。共稼ぎの夫婦、学者タイプの夫とは、他のことでは意見が食い違うことが多かったが、犬の話もまた相反する。

「修司さん、散歩は、朝夕だから、私は、朝当番にさせてよ、あんたは夕方、と分担したのに、決して夕方散歩をさせてもらったことがない」

美穂はシャンプーも獣医通いもいやになって、仕事を理由に、犬を飼うのは止めたいと言ってきているが、譲歩して柴犬だけは切らさずに飼いつづけている。今の犬は、一〇年目、やさしい犬で奈々と呼ぶ。

山村夫婦は、その月末に引越してきた。

家具は思っていたほど多くなく、大きなまっ白い犬が、家族と一緒に乗り込んできた。狭い貸家の中に丈六〇センチ、横の長さは八〇センチ、重さ四十キロもある。人間なら小学三年生ほどの犬が、垂矢子に負ぶわれて入ってきた。眼を疑うほどまっ白い毛に埋もれ

た。彼女はサモエドに背中を全部預けている。何と大きな犬なんだろうと思つた。大きさに驚いただけでなく、吠えない。人懐っこくて、「オイデ」と、声をかけると、美穂の傍に来て、足元に座りこんだ。

修司は、珍しさだけでなく、これも縁だと喜んで、歓迎した。

不動産屋から聞くとサモエドという純血種で、牧場で羊を追う犬だということがわかつた。しかし人間にもなじみ、大人しく飼い易さは、素人向きだという、毛の手入れを第一にして、感染症に罹らないようにすれば、育てやすいと、簡単に紹介してくれた。

今まで、この貸家で、犬を飼つた人はいなかつたので、美穂は、自分の無防備さに唖然とした。確かに契約書には、犬一頭と書いてある。長い付き合いの不動産屋である、怖いもの知らずで、契約を簡単に済ませ、犬のことは話題にもしていなかつた。夫の仕事の関係で、小田原に通勤できる範囲で駐車場の広いところで、言つて、その意味は、非常事態の時には、職場の車を持ち込むことがあると言う理由で、少しばかり値を上げてくれた契約書。もう千葉県館山の家は引き払ってしまったという、言い訳を聞かざるを得ないほど、弁舌巧みにするつと家に入り込んできた。

入居してみてもわかつたが小牛のような犬は、大人しく、従順な犬だということが分かつた、顔を見てしまうと大好きでなくても小さな耳、目が小さく、ぬいぐるみを抱えているような、温かさで、すぐにフアンになつてしまふそう。日本では、まだ二〇〇頭も飼われていないという、稀に、ロシアから入つてきているが大好きには最高の純血種であることが分かつた。顔の愛しさだけでなく尻尾の巻き上げ方が大きく造形美を感じて、誰でも手放せないという。竹内夫婦は、この犬のために空き家探しをして、里村の貸家が空いたという情報で即刻契約して入居してきた。

サモエドの寿命は短い、一二年間と言われ、入居してから九年目に亡くなった。

この年、里村の番犬、奈々も、サモエドの後を追うように、二十年の寿命を全うして一夜で亡くなった。

美穂は、奈々が死んだ後もう犬を飼うことは限界かと思ひ、新しい犬を探さなかつた。貸家にいるから、いい、と思う気持ちも内心あつた。

竹内夫婦の二代目は、横長のダックスフンドの「シュー」、この犬は、若さあふれる、ギャンギャンという感じでよく吠える。修司は、ダックスフンドに親しみ

を感じるのか傍によって抱かせて貰っていた。夫の中では、自宅で飼っていたオスの柴犬、奈々との別れができていないのか、時々間違つて「奈々」と呼び、窓の外からでも声をかけて気にしていた。

ダックスフンドは番犬と呼べるのか、室内飼いなのに、鳴き声が派手だ。家のそばを猫が通つても吠える。その鳴き声が、日夜問わず、里村宅に響くほどよく聞こえてくる。

修司は、ダックスフンドの方が気になるらしく、仕事の行き帰り、声をかけている。

奈々と、ダックスフンドは大きな違いがあつて、とても、似ていないのに、修司は、何を勘違いしているのか自宅の奈々が死んだ後、A棟の二代目シューと区別がつかなくなつていた。外から見れば、全然違うのに、ダックスフンドと区別がつかなく、その引き換えに奈々が盗まれたと思ひこんでしまった。

夫は、自分の家に、犬がいないわけがない、盗まれたのだ、盗んだ人は亜矢子に違いない、という思いが固まつてきて、毎朝、「犬が盗まれた」と、言うようになった。

二代目で、やっと室内犬らしい、いふなれば番犬ら

しい犬に出会つた。それが今飼っている、ダックスフンドである。竹内は、ダックスフンドにマッチしない呼び名、「シュー」と付けた。走っている姿から、「シューちゃん」と呼ぶと、人なつっこく誰の所へでも飛んでくる。その呼び名に偶然だが、美穂の夫の名が修司と呼ぶので、呼び名が似ていて、すっかり感情移入していた。「修司」と「シューちゃん」はこの時から縁があつたのかもしれない。この犬を煙たがる人はいない、親しみやすく足が短くて、耳元まで毛が垂れている。

シューちゃんにたどり着くまで一〇年もかかっている。夫も八十歳、美穂は七十六歳になつていた。

賃貸借の年数がイコール犬の年月になつている。竹内は一二年の中で、今は二代目の犬を飼っている。初代の、サエモドが、サブと呼び九年間。二代目のダックスフンドをシューと呼び、三年間たつている。

この期間、入居時に背負うようにはいつてきたサモエド犬、次が、ダックスフンド犬という種類、どの犬を取つても銘柄だ。しかし、愛犬家の竹内夫婦の言い分を聞くと、

「どの犬も買ったのではない、貰うけたのばかり。

犬の販売者が、飼い主から、事情があつて飼えなくなつたという、譲り受けた犬を回してもらつてゐるのだという。本来は保証付きなのだろうが、戻つてきた犬は売れないから、竹内さんに譲つたので感謝されてゐる。だから、ダックスフンドも、いらなくなつた人から、友人という形で貰つていただいでゐるんだ。捨てられない人の気持ちを考えると、友人同士の譲り受けで、納まつてゐるから、竹内さんみたいな人が必要なのです」と犬の販売店のオーナーに言われたそうだ。

そこで、室内犬付きで入居できる賃貸は、大変重宝がられてゐると言う。それも大家さんの理解、隣近所からの苦情のない空間が必要になるらしい。その点里村の賃貸住宅は敷地が広い点もあつて、長年入居を可能にしている。

## (2)

最近、起きぬけに、夫の修司が必ず言う言葉がある。

「俺の犬、盗まれた。あの女に盗られた」この言葉を言うために起きてきたのかと、想像してしまふ、「盗られた」という言葉に美穂はいやな気持ちになる。しかし、いつものことと、ほとんど、受け流してゐるが、断定

的な「俺の犬」という言葉にびっくりする。

修司は、「盗まれた」シンドローム、認知症の渦中の人である。身近なものが見つからなければ、誰かに盗まれた、と言う。夫にとつて身の回りのものすべて盗まれてしまふと言う厄介な病気で、見境なく盗人あつかいする。その犯人は、片付けの好きな美穂に嫌疑がかかるのは当然で、また元通り、すべてのものを畳の上に並べておくと要求される。そうしなければ修司の精神は安定しない。文房具、本を並べた部屋、衣類の並べた部屋は特徴的で、鉛筆一本いじれない。

認知症の初期には、このように並べた生活でも、本屋に行くことも、庭の手入れ、刈り込みも出来た。時間があるときには、テレビ、音楽に親しんでいた。

しかし、最近では、日々の概念が無くなつて、いつの間にか、部屋も書斎も、そして玄関も、物置も全部鍵を掛けるようになって、他人が、いや家族でさえ、家に入れなくなつた。美穂は、ポケットにいつも鍵を入れては家の出入りをするようになった。

この頃から、泥棒が家に再三入つてきた、と言って、「盗まれた」という言葉を多発するようになった。

何を盗まれたのかは分らないが、泥棒が入つてくるということで外側の窓は開けられない、暑い日でも網戸



は禁止になった。そして修司は、すべてに鍵をつけないければ気が済まなくなったのだ。

それでも、特別な人を名指しするようなことはなかったが、認知症が始まって、半年過ぎたごろから泥棒は、A棟の垂矢子と名指すようになった。

「犬？、修司さん、なんの話」

「俺の犬が盗まれた」

「盗まれたって、奈々は、二年前に死んでしまったでしょう、あの時に、もう犬を飼うのは止そうと言ったよね」

「そんなことない。あれは、この間までいただろう」  
美穂はここで、首をかしげ、何気なくやり過ぎそうと、キツチンに入った。しかし、彼は執念深く追いかけてくる。

盗まれる訳ないでしょうと言いたかったが、最近とみに、家で飼っていた「奈々」のことを懐かしむ話題が多かっただけに、「盗まれた」と思いこんでいるなら、それはそれでいいと諦めかけて、話題を逸らそうと、「ご飯にしますか」と問いかけた。

「いや、あの女は、何するかわからない、いつも俺の家の物置から、草刈り鎌や帚を持っていく。俺は何度もみている、いつの間にか、自分の軒下に隠して使っ

ている」

「今度は、掃除用具のことですか、あれは私が使ってもいいと言いましたのよ」

修司はしばらく考えていた、そして思いついたのは「箒のことではない、次に飼った犬の名前のことだ、何って言ったけ、ほら奈々に似て、犬らしい長い顎」

「犬らしい顔でしたら、それがダックスフンドでシューーと言う。黒い犬で、耳が長い、胴も長いとあなたが褒めていた」

「そうだ、それが俺が好きだった犬だ。でも、あれは死んでしまった、いまいる犬、シューちゃんと呼んでいるだろう、あれはウチの奈々と同じ毛色だ。あれはウチの奈々の生まれ変わりだ」

「シューちゃんは、奈々にはちつとも似ていませんよ。今いる犬は、ダックスフンドと言って。横長の体、毛が長く、尻尾は尾びれのようで、愛嬌のある眼で、追いかけてきます。足は速い。毎朝、洗濯干し場で、あなたの足に巻きつくじゃないですか」

「うん、知っている、俺は、シューはいかにもおもちゃの犬みたいで好きじゃないが、でも俺になじんでいるじゃないか、間違いない、ウチの奈々の生まれ代わりだ。俺の家から盗んだのだ」

「うちの柴犬は、四本の足で立つ姿が犬らしい、いい番犬でしたよ」

「でも、奈々が死んで、間なしにシユーが来ただろう、シユーは俺のうちの犬だ。奈々の生まれ変わりだ。奈々も茶色で艶があった。奈々の生まれ変わり、盗んだんだ」

話がこじれてきた、ここまで来るとどう説明してもらちが明かない。夫は、自分が言いだしたら、絶対に引かない。かえって意固地になって感情をぶつける。そして、いつもの泥棒話が長くなる。

竹内亜矢子は、夫にとっては犬も農機具も盗んだ人として、夫の頭にこびりついてしまった。

夫の泥棒の話は、寝起きが多い。まるで寝ながらずっと考えていたかのよう、起きたとたんに言う。それは、かなり夫の頭を悩ませたもので、相手は、亜矢子に限定している。彼女が盗人であるという、とっかかりは、掃除器具であり、その後、犬になった。犬は、確かに家で飼っていた奈々が老死したことが、影響している。長年飼っていた柴犬が死んだ。この結果はいたしかたなかった、犬の寿命が十七〜十九年と言われているのに、二〇年も持ったという、タイトルを持つ犬である。

修司は奈々に愛着があった、二〇年も生きていたのだから、家族の一員のような、その喪失感が、盗まれたという感情に流されたのだ。シユーちゃんが夫になつくことも、夫から見れば、混乱の原因となっている。

奈々が生きていた時には、散歩一つしたことがないのに、何という感情移入なんだろう。その上、家で犬を飼うことを辞めてしまったから、夫に混乱をまねいたのかもしれない、夫の言うままに「シユーちゃんは、奈々の生まれ変わりだ」と言わせておけばいいのかもしれない。

だが、「奈々が盗まれた」と言われた時には、びっくりした。認知症の初期症状。一番身近で大切にしているものを「盗まれた」という訴えは、大かた貯金通帳であり、大切にしていた置きものが多い中で、生きている犬が盗まれたという例は稀である。修司の母親も八十二歳の時に、軽い認知症から訴えが広がって行ったが、その被害は、「お金であり、盗まれるのは貯金通帳であった」それ以外のものは、あえて探せば、指輪であった。いつの間にか、通帳を盗まれないように、隠し続け、そのあげくに隠した所が分からなくなって、警察に電話する、それで、母の預金は閉鎖されて、預金が降りなくなってしまう。この悪循環が母の通帳泥

棒事件であった。年々その頻度が多くなって、しまいには警察も、とり合わなくなつた。

修司は、現役時代から貯金通帳を持つたことがなく、全部妻任せで、美穂が管理していた。お金に不自由することなく育つて生活してきたので、貯金通帳の存在も、関心もなかつた。若い時には母任せ、結婚してからは妻任せで生きて来られ、幸せだつた。

朝の日課として、雨でもない限り、亜矢子は、シューを抱きかかえて、庭先の物干し場まで来て、シューを自由にする。もちろん、室内犬だから首輪で繋がれているわけではないので、抱きかかえているシューを地べたに降ろし、背中を叩くと、その合図で、シューは走り始める。その向こうに、犬の好きなB棟の岩崎さんが「シューお出で」と、手を述べれば、体を伸ばし、首をあげて、岩崎さん目指して走つてゆく。その声を聞いていたのか、修司が家から出てくる。ピーと口笛を吹くと、シューは、岩崎さんに行かずに、修司に向つて駆けてくる。そこで、美穂まで洗濯干しを止めて、シューと大人の駆けっこに付き合う。亜矢子抜きで、十五分ほど遊ぶ。これがシューの運動で、シューでなければ、出来ないショーである。

修司は、シューちゃんを遊ばせる日課が、楽しいのか、シューが外に出てこない時でも貸家の側を行ったり来たりしている。しかし、この時のシューは、夫を部外者の如く、室内から窓枠に足を掛けて吠える。その吠え方も尋常でなく、だみ声で大きく吠える。亜矢子のいない家の中のシューは、防衛本能むきだし、役割を全うすべく、窓枠に足を踏ん張つて吠える。

夫は、吠えられても、平気で、また手慣づける運動タイムとは区別するのか、シューと、声をかけながら、貸家の周りを掃除する。

修司の日課は、広い庭の掃除と、貸家の周りの草むしりが仕事である。美穂がちよつとでも手を出すと、「俺がやるから」と止める。自分のテリトリーを侵されるのを恐れるように、美穂の手出しを制する。

「こんなに可愛がってもらっているのに、修司さんが家の裏を通ると、なんてこつちや、ギャンギャン、ピーピーと吠えるのよね、なんで知っている人と思わないのかしらね」と、美穂は普段からの不満を言つてみた。まるで、泥棒がきたかのように大声で叫ばれると、自分の敷地なのに、と彼女は腹が立つ。

「しようがないのよね、室内犬は、自分の家だけが、自分のテリトリーで、外を歩く人は、侵入者なのよ、

そのように仕込まれているから」

十分理解ができるが、飼い犬は、牛乳配達も、新聞配達にも鳴かない、親しげにオートバイを見ている。

その代わり、知らない宅配人が来ると、これこそわがもの顔でキャンキャンと、家族が顔を出すまで吠え続ける。

吠えられた宅配人が「シューちゃん」と呼ぶと、一瞬吠える声を止めるが、しかし、すぐに元に戻って鳴き叫ぶ。シューは、用心棒としては、とつても役に立つ。

美穂から言うと、自分の庭先を歩くだけで、貸家の犬に吠えられることはない、本心気分が悪い時には、怒りを感じる。しかし、シューはよく吠える犬で、誰れ彼れなく、構わず家に近づく人には吠える。

美穂は、改めて、亜矢子の洗濯ものを見た時にびっくりした。こんなに犬はおむつシートを汚すのだろうか、シューはどんな行動をしているのか想像だにしていなかった。たかが部屋三つである。犬のいるところは、玄関から入った六畳の間に、赤ちゃん用のゆりかごベッドに置かれている。コンクリートのベランダにカラーパネルの庇が付いて、そこが洗濯ものの干し場になっている、洗濯機が付き、そして外のものを洗

う水道と洗い場がある。犬は体が汚れるとここで水を掛けられている。また靴やら雑多なものを洗うことができ、この流しは重宝している、そして、五坪ぐらいの庭があり、その先に花壇が細長くある。また庭の東側に、私用の物置、家電の店で買ってきて備えることも許可されている。ゆえにこれらのすべてを加算すると二三坪の敷地、貸家と言える。

里村が親からの遺産で広い畑を貰ったのでそれらの土地に貸家四棟を建てた。そしてB棟からC、D棟に掛けて面積があるので隣の騒音という苦情はほとんど聞かえない。いやテレビの音が大きいというクレームが付いたことはあるが、入ってくる人たちは犬好きが多かったせいか、クレーム付いたことがない。幸いに一八年間も、それも二代にわたって一日たりとも、犬のいない生活はしたことがないという、犬好きの賃借人と付き合ってきた。

美穂もクレームを付けたことがない、他の入居人も恵まれ、だから竹内は、犬を手放さずに貸家住まいができるのだ。これだけの敷地を容する貸家は、他には見つけにくいだろう、平屋の古い、三五年以上のものが、空いてもすぐに埋まるという重宝した貸家が維持できるのだ。

八十二歳過ぎた頃から、修司は、危惧したとおり認知症が出てきた。もちろんこだわりのある人で、物を溜めこむ、そして一枚の紙でも捨てられない、整理できない性格は、なおも片付けられなくなつて、乱雑にするようになった。その部屋は、書齋だけでなく、居間でもあるし、寝室、そして廊下でもある。

夫の認知症の初期、犬が盗まれた、と言いだした時には、びっくりした。その年、柴犬が亡くなつた年である。認知症の始まりの症状が「盗まれた」なのだろう。美穂は、義母の時の認知の症状、「盗まれたシンドロームには、慣れてはいるが、なぜ、寝ている間に、この盗まれるという単純で、根深い妄想に大の男が侵されるのだろうと思つて、情けなくなる。以前同居していた義母の場合は「貯金通帳」だつたから、なんとなく、「普通の認知症」だと胸に落ちやすかつたが、その母親と同じ年齢になつた修司から、「犬を盗まれた」と訊くと、胸がつぶれるほど「イヤーな気持ち」になつた。

修司が、盗まれたというその犬は、十四歳のシユーのことである。美しい茶の皮毛で覆われた顔には丸い

鼻と少し離れた大きな眼が可愛い、駆け足で飛んでくるときには、毛並みが流れ、短い脚まで毛に覆われて、しつぽが見えない時には毛の長い球が飛んでくる。丑矢子が「シユーちゃん」と呼ぶ、その瞬間に丑矢子の足もとにうづくまる。なぜ、シユーちゃんなのと、彼女に訊くと、

「前の飼いが付けたの、彼の呼び名です」とシユーちゃん抱きとめた彼女が、意にかいさず言う。

美穂は、ときどき、修司が「盗まれた」と誤解しているシユーのことを「実はね」と、前置きして「うちの夫、認知症なの」と打ち明けたくなる時がある。しかし、その言いたくなる気持ちを抑えている。修司がまだ認知症の初期であるなら話す意味があるが、今のうちに、中期認知症になりかかつていては、話したとして意味がない、もう後戻りできない病気なのだから。それだけでなく夫の認知症を、美穂は、隣近所の付き合いでは隠している、話が深入りしなければ隠し通せる、挨拶程度の付き合いの人には、分らない。

しかし、毎朝、「シユーちゃんは俺の犬だ、あいつ、何ていったかね、彼女に盗まれたのだ」と、毎日言っているこの言葉に、うんざりするのには、美穂と娘の友

香だけだ。

このフレーズに陥ってはいけないのだが、「なんで犬なの、なんで財布じゃないの」と美穂は思ってしまった。

しかし、夫の認知症は、もう中程度まで進んでいる。

認知症科のある精神病院に通いだして、はや二年経つ。最近是在宅で安定しているが、一年前までは、家族はその症状によってすべての電気器具のスイッチを壊わされ、エアコンから、電子レンジ、テレビまで、使えなくなった。夫に生活リズムを破壊させられて、彼を専門病院に入院をさせざるを得ないと思った矢先である。

しかし、どの認知症病院を見学しても、また認知症グループホームの様子を聴いても、今の夫の症状では、入院生活できないと知った。入院している患者が、ほとんど、人間の大切な機能、話す、知る、見るという機能を維持することなく、食住事足りて、安全に置かれていてという感じである。今安心して家にいる生活とは違った生活をさせては、可哀そうだと言うことに気づいて、在宅ケアを続けている。家にいれば、夫は独りでもいられるし、その中で音楽を聴き、テレビを観、食事も冷蔵庫に置いてあるものを食べる、冷たければ、簡単に温めるだけの電子レンジを使って食べる。

もちろん、トイレも使えるという日中独居の生活が維持できるので、入院させることはない、週三回の認知症のリハビリを受けさせて凌いでいる。リハビリのない日は、本を貯めた応接室で、いろんな本を出して眺めているし、ことによれば思うことがあるのか、何日も同じものを眺めている、それらは、名山の本であり、動物、または旅の本である。

家の中にいければ、終日、独りでもいられるという、思わぬ底力そこちからに気づいて、美穂は、日中は家を空けて看護協会立のナースセンターで、看護師などの就職相談を続けている。一日八時間、週四日の勤務。夫は、週四回、病院のリハビリの車に送迎されている。午後四時に帰って、家族が帰ってくる七時まで独りで過ごすことができる。庭仕事をしながら、一人でも退屈せずに家族を待っていられる、優雅に。その中では、エアコンや電話機やテレビも操作ミスで故障したことはあるが、いうなればプッシュボタンのミスで、それなりに生活している。外出は、近くのコンビニで一時間かかってアンパンやバナナを買うことができる。

最近顔見知りの店員の勧めでコンビニのコーヒーを飲むようになった。夫は、コーヒー屋に行ったと思いきんではいるが、それが結構楽しみで、夕方、家

にいないと思うとセブンイレブンに行っている。コーヒーにアンパンを食べる、楽しみが増えて美穂は良かったと思っている。家にいない夕方はコンビニのコーヒーで見知らぬ人としやべっていることが多くなった。夫の認知症をある一定の推移で維持できるものはコンビニのコーヒーと貸家のダックスフンド、シューちゃんのおかげと思っている。

四月、夫は八十三歳の誕生日を迎えた。美穂は七十九歳。後期高齢者で、支え合わなければならぬのに、夫が認知症で、家の経理や家計がぜんぜんできなくなった。この経理事務が結構重い。貸家を四棟持っているから、修繕費なども多く嵩むようになり、美穂は独りでやることの限界を感じるようになった。世代交代を図りたい。息子夫婦に任せる時が来ているだろうが、彼等は他市に居てまだまだ寄り付かない。

最近、夫の言うこと、もはや泥棒症候群、その一つ一つに驚かなくなっていた。例えば、泥棒が入ってくるからと言って、すべての部屋に鍵をつけ、大事な農具や掃除用具類は、和室に持ち込んでいる。一番つらかったのは電気ノコギリや、ガソリンの入った缶を持ち込んでいることだ。ガソリンが発火するのを恐れ

て、油を抜いたタンクと取り替えて、素知らぬ顔で、農機具の入った部屋を掃除するのだから、この気持ち悪さはなかったが、認知症の方々が入っている病室に、夫を入院させなくて済むと思えば我慢ができた。夫の症状は、泥棒が入らないように作戦、嚴重な鍵と、それらの機材が使えないことに我慢すれば、なんとか、在宅ケアで、やっていけるコツを、美穂は覚えた。

もう一つ、大切なことは、泥棒が入ってきて、多くものを盗んで行ったという妄想や、だから何でも家に持ち込んでおくことに慣れ、夫が盗難に遭った話を、決して否定せずに聞けるかどうかである。辛抱強く、真面目に聴く、そして警察や市役所への電話を何本かけても、我慢をして、じつとその事案が通過するまで待つことを覚えてきたので、家の中が平穩に流れるようになった。

犬を飼っている人の多くは、貸家生活する。なぜだろうか、と疑問に感じる。子供がいないから、か、それとも家が他者のもので、動物の臭いとか、汚れ、または荒されても、補償すればいいから、と考えているのかもしれない。本当のことは分からないが、この方々は、一生自分の家を持たずに生活する人で、自家を持

つことのデメリットを知っているのかもしれない。なぜかという、自分の家を持って高額の支払いを返済するよりは、賃貸で自由に動ける生活体を選んでいいのかもわからない。そこで、家の中の犬の存在は、家族が地域と繋がるよりも、もっと色の濃いつながりが期待出来る。犬に愛情を注げば、その分、返ってくる。

夫の「盗まれ」現象はだいぶ続いている。今朝も起きてきて

「俺の犬が盗まれた、あの女の名前は何というのだ、契約書があるだろう、警察は契約書を持ってこいと言っている」

ここまで執拗に、賃貸契約書を持ってこいと言われてると、ごまかすことができない、もちろん警察は自作自演、そんなことを言っているのか、夫はすっかり信じている。

美穂は、夫に渡すつもりの契約書は、「大木佐和子」と偽名で作ってある。夫はそれを信じている。今後警察に持つていくことはないと思うが、持つていかれたら困る、今の様子では、実際持つていくこともないように思える。美穂はこの場を、一時をしのげばいいと気安く考えている。

それでいて、夫は、外にいそいそと出かける。7時半になるとダックスフンドが、飼い主の垂矢子の膝から放たれて、ビューと駆け抜けて、隣家の岩崎さんの足元に転がっていく。岩崎さんが拾い上げて胸に抱いてくれる。この繰り返しの中に、夫も入ればいいものを、泥棒と嫌疑をかけてからは素直に仲間に入らないで、離れたところから見ている。そして、夫と同じ音読みのシューちゃんには、洗濯を干している美穂の足元に来て抱かれたように、くるくる舞っている。ダックスフンド特有の厚い毛に蔽われた、体で愛嬌を振り向いてくる。

修司が声をかければ、寄っていくだろうが、夫はじつと見ているだけで、声をかけない。

美穂は洗濯を干す手を休めて、シューの動きを眺めている。本当に犬の走り方はリズムがない、ただ前に行きたいだけなんだ。

この犬が、夫の頭では盗まれた犬、奈々なんだ、という思い込みをどう見ても柴犬の「奈々」とは、遠くかけ離れているから、おかしい。でも、夫の思い込みを止めようとしても無理だと、思っている。

「修司さん、シューがそっちにいったよ、抱いてほしいと言っている」



美穂は、足元にいるシューを、夫の胸に押しつけた。  
「おお、シューおはよう、元気でしたか、そうかそう  
か」

太い声で夫はシューを激励している。うれしそうだ、  
夫は本当に夫が好きなのだと思うと、美穂はいたたま  
れない気持ちになる。

今年も終わろうとしているのに、修司の認知症を治  
す薬はない。美穂がやれることは義母の時と同じ、最  
後まで生まれて育ったこの土地から、シューのいるA  
棟を気に掛ける修司に逆らわずに、これからも過ごさ  
せたいと胸に決めていた。

(2020・6・29)

参考 賃貸物語(1)「ネコを侮るな」 群系39号〇二七年

賃貸物語(2)「金魚の縁」 群系43号〇一九年

文芸社10月新刊のご案内




最新刊  
元日本児童協会副理事長  
元長野県児童福祉協議会会長  
小野友貴枝

小野友貴枝  
『私生活』は、  
『私生活』は、  
『私生活』は、  
『私生活』は、  
『私生活』は、

高円寺の家  
その静かな  
たたずまい  
女の監獄  
だっ

社協を問う  
住民ファーストの  
組織へ！

ブログを読んで下さい

作家・小野友貴枝のひろば (暮らしのノート ITO)  
毎月2回素敵な原稿を入れています

小野友貴枝 (本名 小野光子)

URL: [http://blog.livedoor.jp/hbk3253/archives/cat\\_10041481.html](http://blog.livedoor.jp/hbk3253/archives/cat_10041481.html)